

## 自然の美

### 加藤文子 スローになって宇宙を香る

.....  
前世紀、日本の芸術家たち(三島由紀夫が心に浮かんでくる)のように、日本出身のアーティスト、加藤文子は、伝統、そして自然を中心とした信仰の衰退、そしてそれに続いておこる精神状態に弊害をもたらす影響について憂慮している。分刻みの体勢とタイミングの変容が極度に精密な加藤の振付は、自然のエネルギーと変化への鋭い感覚から生じる。我々(Time Out Chicago)は、6人のダンサーと2人の音楽家で構成される作品、リンクスホールでこの金曜日に初演される『おととうごき夢十夜 第三弾』のリハーサル直前に彼女と話した。

#### なぜあなたは、コンサートのタイトルをEVE(イヴ)としたんですか？

.....  
何かの前夜であり、何か近づいている事を意識する時、期待が生まれますよね。私の中に、その期待の緊張感が欲しかったんです。「何かやってくる。準備は万端か。」というように。

#### 何がやってくるんですか？

残念な事に、戦争が今も起こっていて、環境問題として温暖化や、(エネルギー問題では)ガソリンの値段がすごい勢いで上昇していたり、人種差別、南半球の貧困...と、不安な未来を予期させるような多くの問題が起こっています。漱石が『夢十夜』を書いたのは、ほぼ100年前。産業化と軍事化をもたらし、当時の日本の中を激しく吹き荒れていった西洋化に疑問を呈した著作の百周年がやってこようとしているんです。男性はちょんまげと着物をやめ、西洋風の断髪と洋装を始めました。漱石は、人々は(西洋化に)盲目的に追随しているように感じたんです。西洋は素晴らしい。けれども自分たちは、人間として、以前のものであっても素晴らしい何かを、そして自然界との関わりを忘れてるんじゃないかと。漱石は、私たちに、自分たちが何処へ向かっているのか、そしてこの先何が私たちを待っているのか、一方私たちは、どんなことを心の奥底に既に持っているのかも伝えようとしたんです。

#### 話はどんな内容なのですか？

話は10章に分かれていて、各々が異なるメッセージを抱えて、語っている気がします。一夜では、男は女に、「もう死ぬのかい？」と聞くと、女は「ええ、もう死にます。待っていると約束して下さい。100年たったら会いに来ますから。」と言う。男は待ちます。そして百年後、美しい花(百合)が彼女の墓に咲くんです。今回のパフォーマンスでは、他のいくつかの章にも触れています。

#### 『おととうごき夢十夜 第三弾』の振付の大部分が、大変遅い動きで構成されていますが。

そうですね、他のダンスと比べると遅いです！音は観客に早く届いて理解される。でも、私たちは時折本当に動き見るのにはもっと時間を必要とする。動きが注意深く丁寧に行われると、美を醸し出します。あと、どんな繊細さを私たち(人間)が兼ね備えているかも人々は認識します。長く時間をかけるのは、貴重なことです。ただ生きているだけで、どれぐらい貴重な事かを、私たちは忘れてしまいます。ダンサーは、時間と、そして空間でどのように立つかに対して異なる感覚を持っているべきだと思います—異なるというのは、観客と自分たちとを分け隔てる為ではなくて、より深い繊細な感性に開かれている為です。

#### どうも、あなたのアプローチには哲学が背後にあるようです。

わたしの好きな言葉のひとつが「風流」です。Emailにも使っています。風流というのは、「はかなさ」への、しかし、同時に偉大なる存在の瞬間への肯定です。もとは道教からきています、そして今の中国では風俗的な意味で使われますが、日本では未だに「風が流れる」という語源的な意味に関連しています。私たちは風のように、あっちこっちへゆれて、日常で世俗的な生活と、神聖な生活を行ったり来たりします。けれどもそんな中で、神聖さを日常の世俗の中で認識する時、自分たちの全存在を掴んで、宇宙の収縮を感じます。けれども、究極的には、ゆっくり踊るとか早く踊るとか、大きくとか小さくということではなくて、それは在り方だと思うんです。私が目指しているのは自然に従った無です。